

# 実践報告「英語嫌い」に英語の勉強をさせる方法（その3）

堀内 ちとせ

## 1. はじめに

英語が専門でなく、それほど得意でもない学生が、少しでも頻繁に英語に触れられるような授業形態を、藤田保健衛生大学、衛生学部、衛生技術学科1年の131名（2003年度後期）の「読解の授業」を対象に検討する。

## 2. 方法

以下の要領で授業を進め、③～⑥を2週間ごとに繰り返す。

- ①専門が「医療関係」であるため、できるだけ学生の興味を引きそうな、「健康科学系の教科書」を使用する。また、長めの文章ばかりが載っているものを避け、「短めの文章」がいくつか載っているタイプのものを選ぶ。
- ②授業の第1回目に、学生自身が読みたいと思う文章を教科書から3つ選ばせ、その「学生の希望」の集計に基づいて授業を進める。
- ③「解説」を行う前の週に、付属のテープ（本文を読んだもの）を聞かせ、その単元に出てくる「単語を医療関係のものを中心に解説」する。また、1回ずつではあるが、その「単語の発音練習」をも併せて行う。
- ④「単語説明」を行った授業の次の授業までに、「予習レポート」を提出させる。「予習レポート」とは、本来なら自宅から自主的に行ってくるべき「予習」を「レポート」という形にしたもので、「評価」の一環とする。内容としては、その日の授業で「解説」予定の文章の「要約」あるいは「全訳」を試みさせる。文章全体の「解説」の授業を受ける前に、各自で「全体的に目通しさせる」ためである。余裕がある学生には、その単元付属の「True/False問題（以後、T/F問題とする）や、その他の「問題」をも行わせる。「予習レポート」を行うにあたって、「疑問点」がある場合は「学生同士で相談」し合っても良いこととする。但し、レポート自体は自分1人の力で行うよう指示をする。学生同士で相談し合っても納得がいかない所が残る場合は、最後に「疑問点」としてレポートさせる。「予習レポート」では、内容把握の「正誤」等、「質」的なものは問わず、「試みた」ということ自体を「努力点」として評価する。
- ⑤教員が全体的に「解説」を行う。「解説」は、文章の「全体的な解釈」を中心に、構造的に難しい点、解釈する上で難しい点などの説明を踏まえながら行う。学生の眠気覚ましのため、前の授業に説明し発音練習させた「単語の意味」や間違えやすい「文の構造」等のポイントを問うような「問題」を随時出しながら進めていく。「問題」の「解答」は問題を出した後、すぐ伝えるのだが、それを聞く前に予め配っておいた紙（以後、「練習の紙」とする）の方に、学生には自分の「答え」を全て書くように指示をする。こちらも「答えの正誤」の方は問わず、眠らないで授業を受けていたかどうかを知る手段として、授業後、提出させる。
- ⑥「解説」があった次の授業までに、「復習プリント」を各々解答させ、その「答え」を提出さ

せる。「復習プリント」の「問題」は、「解説」の授業で「ポイント問題」として出されたものが主であり、この「問題」に再度1人で答えることで「復習」を試みさせる。「復習プリント」は「予習レポート」とは異なり、既に授業で「ポイント」説明を受けた後であるため、「質」、つまり、「答えの正誤」を評価の対象とする。ただ、授業内での解答を避けるため、「復習プリント」は「解説」の授業後、配布することにする。「解説」の授業終了後、「復習プリント」を解答し始める直前までは、分からない所を「学生同士で相談」し合っても良いこととする。それでもまだ「疑問点」が残る場合は、再度「疑問点」としてレポートして来るよう指示をする。

### 3. 今回の試みに対する反省（学生へのアンケートをもとに）

#### 3. 1 「予習レポート」について

前回の試みで、初めて「予習レポート」というものを必須のものとしてみた。その結果、どの予習内容の「項目」に対しても、「役立った」あるいは「時々役立った」と答えている学生が過半数を超えていた（＜全訳＞75+16=91%、＜要約＞38+25=63%、＜T/F問題＞16+49=65%、＜疑問点＞44+42=86%）ため、今回も「予習レポート」は必須ということで実行した。

内容としても、前回と同じように、まずは「要約」あるいは「全訳」を行わせ、余裕がある場合は「T/F問題」や、その他の「問題」を自主的に行わせた。また、「予習」している時に分からない所が出てきた場合は、可能であるなら学生同士で相談し、それでも解決しない場合は「疑問点」としてレポートさせることも、前回と同様である。結果としても前回と同じく、どの予習項目も大方「役立った」と見て良さそうな結果（＜全訳＞61+30=91%、＜要約＞39+32=71%、＜T/F問題＞63+29=92%、＜疑問点＞30+49=79%）となった。

＜全訳＞（％）		＜要約＞（％）		＜T/F問題＞（％）	
役立った	61	役立った	39	役立った	63
時々役立った	30	時々役立った	32	時々役立った	29
役立たなかった	9	役立たなかった	26	役立たなかった	8
分からない	0	分からない	3	分からない	0

＜疑問点＞（％）	
役立った	30
時々役立った	49
役立たなかった	20
分からない	1

前回と今回で大きく違っていたのは、「T/F問題」を「役立った」あるいは「時々役立った」としている学生が90%を越えている（前回：今回=65%:92%）ことである。これは教科書に掲載されている「T/F問題」の形式のためであったと思われる。前回採用したテキストでは、英文の内容の正誤を問うような形式だったのに対して、今回、使用したテキストの「T/F問題」は問題も選択肢も全て日本語で記されているものだった。そのため、予習する上でかなり参考

になったようである。「内容理解を助けた」、「全訳する時の参考となった」とコメントしている学生が多く見られた。

「疑問点」の書き出しについては、「授業を聞く目安」となり「役立った」、あるいは「時々役立った」と答えている学生が今回も多く見られた。ただ、ここで気になるのは、「疑問点」の書き出しが「役立たなかった」と言う学生が少し目立っている（前回：今回=8%:20%）ということだ。「授業の解説で理解できたから」というコメントには安心できるのだが、中には「疑問点に答えてもらえなかったから」とか「疑問点を（レポートとして）提出してしまうので分からなくなる」といったコメントが見られた。

「疑問点」に関しては、必ず自分で「疑問箇所」を教科書にチェックしてから提出するよう授業の最初に指示しておいたはずである。また、「解説」を聞いても「疑問点」が解明できない場合は、どうして再度レポートする（再度レポートした学生に対してはコメントを入れた）なり、直接聞きに来るなりの行動に出なかったのか。

これは医療系大学であるがゆえ、国試が絡んでいない教科の宿命と言えるのかもしれない。あるいは、最後に「テスト」がないということも、原因の1つとなってしまっているとも考えられる。ただ、ここで「解説」時に前もって挙げてきた「疑問点」を意識していないというのは、問題である。これでは、わざわざ時間を取って「疑問点」を挙げて来させる意味が全くなってしまふ。提出前に自分の「疑問点」を教科書にチェックする余裕がないようなら、「予習レポート」の提出時を変更する（授業開始前から授業後へ）などして、何らかの対処をしてやる必要があるのかもしれない。

やはり今回も「要約」を試みた学生は少な目（＜全訳＞：＜要約＞=94%:31%）であった。「要約をするのは難しい」、「要約には時間がかかる」等、今回の学生にとっても、「要約」は「全訳」と比べ高度な行為であることがうかがわれた。また、今回も授業形態が「全訳」を中心としていたことも、「要約」を選ばなかった学生が多かったことの要因の1つと考えられるだろう。

＜全訳＞（％）		＜要約＞（％）		＜T/F問題＞（％）	
行った	94	行った	31	行った	97
行わなかった	6	行わなかった	69	行わなかった	3

＜疑問点＞（％）	
行った	84
行わなかった	16

「単語の解説&発音練習」に関しては、前回も「必要」と感じている学生が多かったため、また、授業内に時間を取ることができたこともあり、今回も前回と同様に行った。ただ、前回の記憶からすると、「必要」と言っている割には「発音練習」の声がほとんど聞こえなかったりする等、学生の積極的な参加が今一つ感じられなかった。そこで、今回は「単語の解説&発音練習」後に、こちらが日本語で意味を言った「単語を発音させる」というような「発音チェック」を試みてみた。「単語の解説&発音練習」の時間にもう少し学生が真剣に取り組んでくれることを期待しての行為である。ところが、実際には、予想に反して「役立たなかった」(19%)、

「分からない」(14%)という学生が比較的多く見られたのだ。

<発音チェック> (%)

役立った	26
時々役立った	41
役立たなかった	19
分からない	14

結果としては、「役立った」、「時々役立った」と答えている学生を合わせて、過半数を少し上回っている(26+41=67%)といった感じであろうか。ただ、コメントを見てみると、こちらが目論んだ通り、「眠くなりにくかった」と言っている学生、「他の人が当たっている時、自分も一緒に練習できて良かった」、「案外1人では発音できないことがある」等の肯定的な意見も見られる一方で、「1人1人当てていく意味がない」「(発音チェックが)なくても(状況的に変わりが無い)、さらには、「時間の無駄」とか「必要性を感じられない」とハッキリ述べている学生のコメントの方がむしろ目立っていた。

「単語の解説&発音練習」に加え、授業内に「発音チェック」の時間までも取ることは、時間的に無理がないわけでもない。否定的なコメントが目立っていたことから、今回初めての試みである「発音チェック」は、授業内の貴重な時間を割いてまで行うことではないと言えるのかもしれない。

### 3. 2 単元ごとの「解説」について

今回の調査も前回と同じように、単元ごとの「解説」は「全体的な解釈」をもとに、構造的に難しい点、解釈する上で難しい点などを踏まえながら行った。ただ、「文法嫌い」の学生のことを考えて、前回と同様、できるだけ「文法用語」は使わないように配慮した。

ただ、前回と今回との違いは、前回までの眠気覚ましの「単語確認」を発展させ、構造的、解釈的に難しい点などの「ポイント」を、「解説」する前にまず「問題」形式で提示し、学生自身に何が「ポイント」なのかを考えさせてみたという点である。その後、その「問題」の「解答」を言うことで「ポイント」の「解説」を行うというのが、今回のやり方である。

考えるように指示しただけでは実行しない学生もいるため、出された問題の「答え」は全て、予め配っておいた「練習の紙」の方に書かせ、授業後、提出させた。前回までは当てて口頭で答えさせていただけの「単語の意味」の方も、今回は全て問題の「答え」として、「練習の紙」の方に書かせることにした。今回は絶えず書かせることにより「眠気覚まし」を試みさせたわけである。また「練習の紙」は、授業に遅れず付いて来たかどうかを判断する目安ともなった。

前回までの「単語確認」に対するコメントとしては、「簡単な単語を何度も紹介し過ぎ」、「何度も(同じ単語を)確認し過ぎ」といったものが目立っていた。今回も、そのことと関係があるのか、「ポイント問題」に比べ、「単語問題」は「役立った」と答えている学生が少な目(<単語>:<ポイント>=33%:56%)であった。完全に「役立たなかった」と答えている学生も「ポイント問題」と比べると僅かながら多く見られた(<単語>:<ポイント>=17%:9%)。

＜単語問題＞（％）		＜ポイント問題＞（％）	
役立った	33	役立った	56
時々役立った	42	時々役立った	27
役立たなかった	17	役立たなかった	9
分からない	8	分からない	8

それに対して、今回初めての試みである「ポイント問題」については、中には「復習プリントをするだけで十分」、「簡単なことまで聞き過ぎ」等の否定的なコメントも見られたが、全体的には、こちらの目論み通り80%以上の学生から「役立った」「時々役立った」との解答を得た（56+27=83%）。問題を出し過ぎてしまうことにさえ気をつければ、「ポイント問題」の方は次回からも行うだけの価値があると言っても良さそうである。また、問題数を減らすことで、「解説が早口」という相変わらずのコメントに対しても対処できそうである。

### 3. 3 「復習」について

前回の試みで「復習」の形態としては「ポイントのまとめ」（が良い）と90%以上の学生が答えていたのだが、今回は新しい試みとして、「復習プリント」というものを予め作っておき、解説後それを各自で行わせることにより「復習」させるという形を取ってみた。

「復習プリント」は、眠気覚ましのために授業中「練習の紙」の方に行かせた「ポイント問題」を中心に構成されている。とは言え、單元ごとにプリントを作るのには結構な手間を要した。ところが、その割には思った程の結果が得られなかった感がある。「復習プリント」を「役立った」と答えている学生の方も過半数を切っていた（47%）。

＜復習プリント＞（％）	
役立った	47
時々役立った	29
役立たなかった	16
分からない	8

コメントを見ても、「ポイントが押さえられていて理解しやすい」、「やる事が明確で復習しやすい」といったコメントが見られる一方で、「授業中に言われた答えを写してただけ（で意味がない）」、「（復習プリントを解いていると）余計に分らなくなることがある」といった否定的なコメントも見過ごせる程ではなかった。さらに、前回の「ポイントのまとめ」的レポートの時にも見られた「分かっていることを再度レポートしたくない」というコメント、さらには「復習は不必要」とまで言っている学生も見られた。

「復習プリント」は「問題」形式になっている以上、やはり「解答例」を渡す必要があると感じた。そのため、今回は全クラスが同じ単元を終えてから、その「解答例」を配ることにした。そして、配る際には簡単にもう一度、「問題」に対するコメント、学生の解答状況に対するコメント等を述べるというような時間をも、授業内に取ってみた。

全て良かれと思い実行したことばかりであったにも関わらず、その配った「解答例」、さらには、その「解答例」に関する「授業内での確認」タイムに対する学生の評価の方もまた、期

待した程の結果が得られなかった。かなりの時間をかけて「解答例」まで作ってやっても、自分でその「解答例」を確認した学生は僅か10%さえも切っており、「授業内での確認」タイムや「解答例」自体を「必要」だとしている学生の方も、過半数を切っている（＜授業内の確認＞：＜解答例＞=42%:39%）のが現状である。

＜自分自身での解答確認＞（％）		＜授業内での解答確認＞（％）		＜解答例の必要性＞（％）	
行った	9	必要	42	必要	39
時々行った	28	不必要	30	不必要	30
行わなかった	63	分からない	28	分からない	28

このことの原因と考えられるのは、「解答例」を配るタイミングが挙げられるように思われる。今回の試みの対象である衛生技術科1年生は3クラスに分かれており、学校行事や時間割等の関係で、進度が異なっていた。ただ、3クラスとも同じ内容の「復習プリント」を行わせる関係上、進度の進んでいるクラスが「解答例」を手にするのは、進度が最も遅いクラスがその単元を終えてから、つまり内容をすっかり忘れてしまってから、となってしまった。コメントとしても、「解答例を早くもらいたい」とか「解答例のコメント時に自分自身の答えと問題（復習プリント）がない」といった意見が多数、挙げられていた。

今回の「復習プリント」では、問題に対する学生の「答えの正誤」、つまり、「復習」の「質」的なものを「評価」の中に初めて入れてみた。そういった意味では、前回までのように、単純にまとめた「ポイント数」のみで評価するよりも、はるかに信憑性が高いもののように思われた。が、「テスト」では自分が理解していることを問われても平気（むしろ喜ばしく思うのではないか）であろう学生も、形が日常的な「復習プリント」となると、話はまた別ようだ。今回もまた、「分かっていること（問題）を再度レポートしたくない」という学生が、前回と同様に見られたのだ。

「ポイントのまとめ」を課せば、「このレポート形式が良い」と言い、「復習プリント」を課せば「これで良い」と学生は言う。しかし、ここで問題なのは、「ポイントのまとめ」を経験した学生は「復習レポート」を経験した学生とは別の学生であるということだ。その一方で、調査の対象である学生が変わっても、いつも共通して言えるのは、「復習は不必要」とか、「理解していることを再度レポートしたくない」と言う少数派の学生が必ず存在しているということである。つまり、注目すべきは、絶えず存在している、この僅かながらの学生の方なのではないか、と思いはじめってしまった。

前回の試みで、「復習として何をすべきか」という問いに対して挙げられた「疑問点の解決」といった点を、今回は「復習」の中に盛り込むことができなかった。何とか、「レポート」だけで「評価」することを考えていたからである。でも、所詮、「レポート」だけで「評価する」ということ自体には無理があるのかもしれない。特に、「復習レポート」を「評価」の中に入れるには少々無理があったようだ。

「予習」として文章を全体的に目通しする方法は、学生によってそれ程の差がなく（「全訳」・「要約」くらいの差こそあっても）でも、「復習」の仕方は個人個人でかなりの差が出てしまう。「予習」してきた「量」を努力点と見なすことは妥当であったとしても、「復習」してきた「量」を「努力」の差と見なすには、やはり問題があるように思われる。そこで、考えた

のが今回の「復習プリント」だったわけだが、先述のように、これにも幾つかの問題点があり、学生に対しても好評であったとは言い難い。

それならば、「復習」としては、一応、前回の試みで学生が指摘していた自分なりの「疑問点の解決」といったことをレポートさせ、その「復習レポート」を提出したかどうかということは「評価」の中に入れるとしても、やはり最終的な「評価」としては、従来通りの「テスト」形式を取り入れた方が良いとも考えられるのではないか。そうすれば、前回の試みでも問題点として挙げられていた「評価基準が明らかでない」といったような問題は、間違いなく解消されるはずである。しかも、「テスト」が絡んでくれば、今回見られたように、授業中に「疑問点」を意識しないとすることも、なくなるのではないか。また、その一方で、「予・復習レポート」からは、学生の「努力点」の方も評価してやるのが可能になるのである。

### 3. 4 「レポート」の効果について

「英語嫌い」であっても、「評価」に関係してくれば少しは「英語を勉強する」ようになるのではないかということを期待して、前々回、前回に続き、今回も「レポート」中心の「評価」体制を取ってみたのだが、今回の学生の反応はどうだったのであろうか。

前回の試みと今回とで異なっていたのは、「復習」の形態である。前回は「ポイントのまとめ」を自分なりに出来る限り行って来させたのに対し、今回は予め用意しておいた「復習プリント」を用いて「復習」させた点である。

まず、前回と同じように、学生自身がこなす「勉強量」に関して、「評価」が「テスト（のみ）だった場合」を仮定させて問うてみた。その結果、今回は「レポート（だった場合）の方が（勉強量が）多い」としている学生が、多少ではあったが、前回よりも少なかった（前回：今回=61%:50%）。選択肢の中で少し気になった変化は、「分からない」と答えている学生が前はたったの3%であったのに対し、今回は20%にまで及んでいることである。これは、今回初めての試みであった「復習プリント」の影響なのであろうか。

＜勉強量（前回）＞（％）		＜勉強量（今回）＞（％）	
テスト＞レポート	17	テスト＞レポート	21
テスト＜レポート	61	テスト＜レポート	50
テスト＝レポート	1	テスト＝レポート	8
分からない	3	分からない	21

「復習プリント」に対して、「すぐにしないと分からなくなる」というコメントがあった。もちろん、一般的に「復習」はできるだけ早く行った方が良いのだが、このコメントは、逆に「（復習プリントの問題が余りにも特殊過ぎるので）すぐにしないと分からなくなる」、つまり「こんなプリントをやるより、自分でもっと有意義に復習できる」と、取れないこともない。「復習プリント」の内容には、考慮すべき点があるのかもしれない。

次に「勉強の頻度」である。結果は、多少の数値の違いはあるものの、今回も前回とほぼ同じような分布を見せた。やはり「レポート」を「評価」の一環とすることによって、学生自身の日常的な「勉強の頻度」を上げてやることは確実のようだ。つまり、「継続は力なり」を正に実行させてやるのが可能なわけである。「レポート」のみの「評価」体制の是非はさてお

き、「レポート提出」という形態を続けさせること自体には、大変大きな意味があると言えるだろう。

＜勉強の頻度（前回）＞（％）		＜勉強の頻度（今回）＞（％）	
テスト＞レポート	3	テスト＞レポート	7
テスト＜レポート	88	テスト＜レポート	83
テスト＝レポート	7	テスト＝レポート	2
分からない	3	分からない	8

「学習の理解度」については、どうであろうか。何と、今回は「レポート」と答えている学生が前回よりもさらに多く見られた（前回：今回=68%:80%）。この違いは、今回初めての試みである「復習プリント」の影響と言えるのだろうか。

＜学習の理解度（前回）＞（％）		＜学習の理解度（今回）＞（％）	
テスト＞レポート	10	テスト＞レポート	6
テスト＜レポート	68	テスト＜レポート	80
テスト＝レポート	17	テスト＝レポート	5
分からない	5	分からない	9

確かに「復習プリント」を実行した今回の方が、「理解度」が高いという結果にはなった（前回：今回=68%:80%）のだが、ただ、先述のように、この「復習プリント」は、手間の割には学生に不評であった。中・高並みにプリントを作って手をかけてやったところで、それに見合うだけの反応が返ってこない（期待が大き過ぎた可能性もあるが）のなら、この結果はさておき、先述のように「レポート」と「テスト」の2本立て体制を実行するのが良いと言えるのではないか。

ただ、そこで「レポート」は「予習」の1本だけとし、「復習」の課題は皆無としてしまっても良いものか。事実、これには問題がありそうである。「レポート」の良い点について書かせたところ、「毎回すぐ復習できる」と述べている学生が多数を占めた。つまり、これは「レポート」としてでも課さない限り、「復習」なんぞは自ら進んで行わないということである。やはり彼らにとっては「復習」も「評価」の一部にしてやらざるを得ない状況にあると言える。

そこで、これもまた繰り返しになるが、「復習」は「疑問点の解決」というようなテーマで各自のレベルに合わせて行わせ、最後の締めくくりとしては、大きな「復習プリント」とも言える「テスト」を受けさせる。「テスト」を行えば、そこである程度、客観的に能力的な側面も「評価」の中に入れてやることのできる（今回の試みでも、「（レポート評価は）客観性に欠ける」というようなコメントが幾つか見られた）し、と同時に「予・復習レポート」からは、「努力点」的な側面の方も評価してやれるわけである。

「レポート」の欠点として、「時間がかかり過ぎる」とコメントしている学生がいた。そういう学生は「レポートの方は程々に、最後の「テスト」で実力を見せてくれれば良い。「テストは一発勝負で努力を評価してもらえない」とコメントしている学生がいた。そういった場合には、「テスト」で失敗してしまっても大丈夫なように、日々の「レポート」の方でしっかりガ

ンバリを見せてくれれば良いのである。現代は何事も「選択」の時代だと聞いたことがある。だとすれば、「評価」に関しても、個人の選択的な側面を入れてやっても良いとは言えないか。

様々なことを考え合わせた結果、従来のような「テスト」を行う体制の中に、「予・復習」をも「評価」の一環として組み込むというこのスタイルが、少なくとも彼らにとっては、最も良い形と言えるような気がしている。

#### 4. 終わりに

今回も、前々回、前回に続き、学生の気を引くことが一番可能かと思われる「評価」の中に、日々の「予・復習」を絡めた形で、新たな試みを行ってみた。

「予習」に関しては、前回と同様、教科書の内容に目を通してやることを主な目的とした、「予習レポート」の形を取った。初めて目にする文章に取り組む「予習」には結構な時間を必要とし、中には「面倒」とさえコメントしている学生も見られたが、やはり「予習する」という行為自体には多くの学生が必要を感じているようである。新しい情報を得るということには、よく英語ができる（と、自分では思っている）学生にとっても、自らやろうという意欲を掻き立ててくれるだけの要素が十分備わっているようだ。

今回、新しく試みたのは、「ポイント」のまとめ型の「復習レポート」を「復習プリント」による「問題」解答型の「復習」の形に変更してみた点である。「復習プリント」を作ることで、前回までは学生により異なっていた「復習量」を統一し、しかも、「評価」の中に「量」的なもの（まとめて来た「ポイント数」のようなもの）ではなく、「質」的なもの（「復習問題」の「答えの正誤」のようなもの）を入れてみたのである。

ところが、残念ながら、毎回の「問題」作成という膨大な労力にも関わらず、それに見合うだけの結果を得ることができなかった。前回までの「評価基準が明らかでない」というコメントを解消すべく、今回は新たに「復習プリント」案を試みたところもあったわけだが、結局、前回までの「分かっていることまでレポートしたくない」、「何回も同じことをレポートしたくない」といった意見を、再度、目にするに至っただけの感があった。

そこで、今回、感じたのは、「評価」に客観性を持たせたいがために、毎回同じような「問題」を行わせて学生をウンザリさせてしまうよりも、やはり最後は「テスト」という形で締めくくべきなのではないか、ということである。但し、完全に「テスト」だけで評価するという従来のような形に戻してしまうというわけではない。前々回、前回、そして今回の試みからも言えるように、やはり「英語嫌い」の彼らに、「予・復習」といった極めて基本的なことをさせるためには、「成績」という「エサ」で釣ることが必要となってくる。

「大学生にもなって（そんなこともできないのか）・・・」と、人は言うかもしれない。が、社会には、「TOEIC～点以上で昇進」というような会社が事実、存在しているではないか。社会人になっても、ご褒美的要素が必要なこともあり得るのだ。だとすれば、大学生が「成績」ごときに釣られて勉強することぐらい、何ということでもない。「結果」が伴えば「手段」は選ばず、である。

「英語嫌い」が、何とか自主的に英語の勉強を継続させることができるような方法を、これからも授業を通して模索していけたらと思う。